

第二期 第二十七号 (四版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.10.20 定有堂書店 発行

特異点

奈良 敏行

(定有堂 店主)

特異点

蚊

今を楽しむ人々 沖繩映画と古書店のあいだ

ワクサカツウヘイ

芝野 浩貴

で、読んだの？

ムラカミヒロミ

9月の日記

齊藤 仁昭

良夜

五百川知子

もつたいない

うしきのどか

九月といえは

山本千津子

鳥取あれこれ その二十六

内田 克彦

天平の詩魂 (上)

秦阜 梅林

さばのみそ煮

あきの素生

…… 編集後記



科学雑誌を読んでいたら、「空間は幻かもしれない」という特集があった。わたしたちが目になっている世界は三次元空間だが、じつは二次元世界のホログラム現象なのではないか、という議論だ。

次元の低いものから、次元の高いものを再現する、というのがホログラムの骨子らしい。平面なのに、立体的に見える。手で触れるとどうなるのだろうか？ むろん触れない。ホログラムと手の属している次元が異なるからだろうか。次元が異なるのに感覚的に干渉しあえるというのが面白く思える。

この前から『なぜ世界は存在しないのか』が気になっていたのだが、ことさらに「実在」へのこだわりが強いからだ。まるで実在に次元の階層があるようで、その審判に汲々としているように読み取れる。

「感覚」が重視される。ここで感覚は主観的なものではなく、客観的な構造なのだ。わたしたちの方が感覚に包摂されている。その中に存在している、という。そのせいか世界は言語のコンテクストよりもシネマの映像の中にこそ存在しているとでもいいたげに、シネマの紹介が頻出する。その中で、気になる二本を見た。『プロブ』と『インセプション』だ。前者は高次の生命体が人間をのみ尽くして一体化する、いわば一元論へ志向する話だ。後者は実在論として精緻なプロットを展開する。夢が入れ子状になっている世界観を体験することとなる。

インセプションって何なのだろう？ 英和辞典で引くと、「始まり、初め、発端」とあった。よくわからない。悩んでいると、たまたま、『音信不通』執筆者の、うしきまどかさんが側について、インとセプションを分けて考えたらいいよ、と教えてくれた。内側に考えを植えつける、の意となり、なるほどシネマのプロットの中心を射るタイトルと知れる。大学生はすごい、と感心した。

夢から醒めることはできる。しかし夢が多層多層になっていると少し話はややこしい。わたしたちは「実在」から逃れることはできない。実在を知ることができないとしても、実在から逃れることはできない。これが人間の存在の仕組みなのだろう。意識存在でありながら、物質の法則の支配下にある、という二重構造のことを言っ

いる。

内側に植えつけられるものは、ここでは「アイデア」だ。夢から醒めることはできるが、意識の核に埋め込まれたものを取り除くことはできない。なぜなら、「取り除く」という思いつき（アイデア）が存在しないからだ。わたしの日頃の言葉に引き寄せれば、この「アイデア」は、固定観念のことだ。固定観念の輝きがオブセクション（妄想）だ。

この固定観念、オブセクションと特異点は関係あるだろうか。

『なぜ世界は』で面白かったのは、「意味」と「意義」の言葉に含ませた思考のあやだ。意味とは対照が現象するその仕方。意義とは「仕方」でなく、指し示されている対象との結びつき。2+2と3+1を考えてみよう。意味（与えられ方）は異なっているが、「4」であるという意義は同一。ところで存在するとは「何らかの意味の場に現われること」。わかりやすい説明だが、「意味する場の違いによって、同じものがひとつの手でもあれば、原子の束でもある」とイメージを添える。5本の木に見えるものを、木立ちと捉えることも同じ理解だ。

夢から醒める、それを特異点の往来と重ね合わせる。言語の夢から醒めれば、書物の立ち並ぶ店内が広がる。本屋の話だ。『なぜ世界は』を核にした一角もあるし、

最近は、『かわり方のまなび方』グループの本もはげしく動く。昨日閉店時間をすぎても去らない男性がいた。「私が読みたい本を教えてください」と目を合わせてくる。「どんな?」「すっきりしたいです」少なくとも「かわり方」方向を求めているわけではない。もうひとつ別の脈絡で売れている『日々是好日』をすすめた。こちらの青空(すっきり)が描かれている本だ。気に入ったようだった。テーマは足元の「しあわせ」への気づきだ。「不苦者有知」という掛け軸がある。「苦と思わざる者は、知有り」、または「フクワウチ」と読む。現象の仕方、つまり意味は異なるが、意義は一つだ。本屋の中には、特異点がある。ここで本は数本の木にも見えるし、木立ちにも見える。しかし求める意義は一つ、「本屋の青空」というものだと思う。

2018. 09. 15



Radish

蚊

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

ソファにだらしなく寝そべり、文庫本を読むなどしていたら、腕にかすかな違和感をおぼえた。見れば我が血液をドリンキングしている最中の、小さな蚊がそこにいた。

普通であれば、反射的に手のひらでその蚊を潰すのだろう。しかし私はそこで「おお」と感動の声を漏らし、蚊が満足ゆくまで吸血を許した。食事を終えた蚊はでっぷりとした赤い腹を重そうに引きずり、空中をこするようにして彼方へと消えていった。

なぜ、私はその時、蚊を殺さなかったのか。答えは簡単で、「珍しかったから」だ。

実は私、生まれてこのかた、蚊に刺されたことがほとんどない。人からは「さすがにそれはウソでしょー」と訝しみの目を向けられるのであまり言いたくないのだが、

それでも正直に申告すれば、人生でたぶん十回も蚊に刺されたことはない。私はもうすぐ三十五歳になるので、だいたい四年に一回の計算だ。夏季五輪か、というリズムでしか、私は蚊に刺されないのである。

どうやら私は、蚊からの人気が非常にないらしい。蚊界にもし「食ベログ」、いや「吸いログ」みたいなメディアがあるとしたら、私の評価は星ひとつであると思われる。レビュー欄にも「二度と吸いたくありません」とか「あらゆる血液の中でも最悪」とか「せつかく羽音を立てないようにして近づいたのに、こんなに不味いとは……。コスパ悪すぎです」などと、散々な書き込みがなされているにちがいない。

だから、たまの蚊の来客があると、嬉しい。「こんな店に来てくれるなんて……」と、潰れかけの定食屋の主人が客を迎える時のような、卑屈な喜びを感じる。「野菜嫌いで運動不足である喫煙者の血」という不人気メニユーしかない我が店だが、せめてゆつくりしていつてほしい。一時羽を休める、パーキングエリアのように活用してほしい。そしてできれば店を出たあとで、「あそこ、味はいまいちだけど、店主の人柄はなかなか良いよ」的な口コミを広めてほしい。蚊が食事を終えるのを、私は半ば祈るような気持ちで見守ったりする。

幼い頃から私は、「蚊に人気のない自分」を自覚して

いた。

夏休みの終わり。両親と共に川の字になって寝ていると、「ブーン」という薄い音が闇を泳ぐように聴こえてくる。蚊が寝室に侵入してきたのだ。そんな時、私はどこか事態に参加できていないような心地に襲われる。蚊は、自分には用がないのだ。

予想した通り、羽音は私を一瞥することもなく通り過ぎていく。そして、鼻をかいて眠っている母の二の腕あたりに喜んで口吻を伸ばす。いや、その姿が実際に見えているわけではないのだが、しかし気配でなんとなくわかる。明けた朝、母は「あー、また刺されてる……」と二の腕をかきながら、不機嫌そうに目覚める。

私だけが、蚊から無視されている。

小学五年生の頃だっただろうか、地域の「子ども会」の企画で、キャンプに出かけた。草の蒸したそのキャンプ場で仲間たちと協力しながらテントを張っていると、誰ともなく「ここ、蚊がすごく多い！」という叫び声が上がった。見れば半ズボンから露わになった仲間たちの太ももには、無数の赤い腫れがかゆみをたたえていた。だが、私だけが無傷。その時、わずかではあるが寂寥の念がよぎったことをおぼえている。まるで私ひとりだけが、違う世界にポツンと取り残されてしまったような、そんな気分だった。

もしかしてだが、私は蚊に人気がないのでなく、そもそも蚊からは「見えない」存在なのではないか。そんなことを思うことがある。つまり私は蚊にとつての幽霊みたいな存在で、所属しているレイヤーが基本的に異なっているのだ。その互いのレイヤーは滅多なことでは触れあわないが、稀に、四年に一度くらいのペースで、ふと重なってしまうことがある。で、その瞬間だけ蚊の瞳に私が現れる。蚊からしてみれば「あれ、こんなところにお店なんてあったっけ？」といった、狐につままれたような体験に近いのかもしれない。

この文章はとりたてて何かを主張したものではない。蚊が鳴いているような文章だ。いま、あなたからは東の間、私が見えているが、しかし私からあなたを見ることはできない。いつかふとした瞬間にお互いのレイヤーがきちんと重なった時は、どうか双方において相手を叩き潰すようなことはせず、ささやかな邂逅を喜び合いたい。そんな小さな祈りを込めて、私はいつも物を書いている。

イラスト・あきの素生



今を楽しむ人々

ヤポネシア⑥

沖縄映画と古書店のあいだ

芝野 浩貴

(地球探検家)

何でこんなに揺れるんだ！

翁長知事が亡くなり、混沌としてきた沖縄に向かう船が台風15号で欠航と思ひ、半分諦めてたが、条件渡航で出航した。かなりの高波の中、出航し、船の揺れが止まらない。青森の仏ヶ浦に小舟で行った時に台風でなく津軽海峡の海流の激しさからジェットコースターのような縦揺れを経験したが、そんなものではなかった。

台風は九州本土を北上し、船はどんどん南下してるのに、揺れの激しさは一向に収まらないので、徳之島に向かっている島の人に、台風の時こんな揺れですか？と聞いてみた。すると、もつともつと揺れるよと言われた。理論的には船の長さが波長よりは大きいから転覆はしないと思いつつも再度島の人に確認したが、大丈夫だよと。沖永良部島にも徳之島にも波が激しくて寄港できなくなると、さっきの徳之島の人が私に尋ねてきた。「台風ですか？」と。台風だから私が不安で尋ねたのに、逆に台風の専門家に聞き返されたのだから、予期せぬ事態らしい。

あとで聞くと、台風15号の影響でなく、その時発生した新たな台風18号に直面したから揺れが激しくなったとのこと

であった。

平素の紀行は、自然に逆らわずにのんびり行くのだが、今回は沖縄学びネットワーク主催の沖縄の先生へのプロボノとして、那覇市で遊歴算家の数理哲人とユラボ活動するため強行突破した。昼の活動は専門的になるので割愛するが、夜の会が凄

い。
オールド沖縄と言われたかつて島であった波上宮から首里を結ぶ途中にモノレールの駅の安里がある。その駅前には沖縄の人でも賛否両論ある山羊専門店が2軒並んでいる。学びネットワーク主催企画行事に、昨年夏、冬、この夏と3回参加したので、述べ滞在期間も長くなり、多くの店を訪れた。山羊の刺身と山羊汁をその2軒で違いを堪能。宮古島などの島では山羊は貨幣であり、冠婚葬祭など、ハニという時は、山羊をしめて、山羊一頭を祝いとして献上するらしい。

その店の近くには、田中一村の絵画が飾られ、昭和の曲が流れているスクガラスの店がある。スクは年に2回、6、7月にしかとれないと詳しく説明を受けたが、その意味がわかったのは後述の宇田智子さんの本(「市場のことば、本の声」)を読んだ時だった。スクを塩で半年から1年漬け込み、熟成発酵するとスクガラスができる。スクは旧盆前後の大潮の時に一気に押し寄せて来るので季節到来の魚。旧暦では6月1日と7月1日は新月で月の満ち潮に関係しているので、偶然ではないとのことであった。

そして、もつと奥に入るとゴヤチャンプルの美味しい居酒屋があるが、ここの主人が三線のプロで何度も賞を取られている。県外で2ヶ所出稼ぎ演奏に行かれたが、その2ヶ所の一つが湯梨浜町だったから、びつくりするとともに、その奇遇性から二人羽織で演奏してもらった。沖縄の人で三線を演奏するのは珍しくないが、プロなので、三線の弾ける沖縄県民が少し演奏しただけで、弦の弾きかたや押さえかたが違うと的確に指導されるのを見ながら泡盛を飲む。フランスからも多くの人が彼に師事しようと集まってくる。

モノレールの駅で安里から二つ目の駅の美栄橋の近くには泡盛の達人がいる。沖縄には四十数社の泡盛の会社があるが、彼はその半分の二十数社の泡盛を組み合わせて独自の泡盛に変化させる。そのブレンド力を学ぼうと泡盛会社も配合を聞きにくるほどである。泡盛は、15世紀に南蛮との交易によって伝来した東南アジア一带にある蒸留酒の一種。シヤムのラオロンという焼酎がルーツ。古酒造りには南蛮麴が最良。蒸留された時にアルコールとともに留出する油脂分は不快な臭いだが、1、2年すぎると酸化され無臭になる。その後アルコールと化合して芳香性エステルが変わる。麴から溶出した鉄・マグネシウム・マンガが油脂物質の酸化作用の触媒として働く。スコッチや日本酒との比較を交えてマスターの夜の講義は延々と続く。壺から匂いが漏れていく。ただ年数長く寝かせればいいものではないといながらも、店内には私が生まれた頃から今まで毎年各種ブ

レンドして寝かせたボトルが数百本並ぶ。

ジユク堂の近くに南大東島から那覇市に移住し、世界唯一の大東そばを経営しているいささんがいる。島の亜熱帯植物からとった木灰を使用し、太平洋の澄みきった海水で手もみした無添加そばを作る様子を詳しく聞いた。南大東島は沖縄本島の東350キロ。港がないから上陸するときはクレーンで運ばれる。

1893年5月から半年間、笹森儀助は反骨のジャーナリストの陸羯南に農民の実態調査を頼まれて、国力の実態を把握しようとして旅に出た。台湾から鹿児島までの琉球弧を回った。宮古、八重山の貧困とマリアに苦しむ姿を、南島探検に書いている。その記録が間接的に三上智恵監督の沖縄スパイ戦史に繋がる。桜坂劇場で観た後、同じくガブ川の暗渠跡、かつての水上市マーケット地の日本一狭い1.5畳の本屋、「古書店うらら」にて、前号でも紹介した目崎茂和著の『琉球弧をめぐる』を購入。店主の宇田智子さんは、沖縄の県産本の多さに魅せられ、那覇のジユク堂を辞めて蒐集されているだけあり、アマゾンでは買えない本がたくさんある。

ハブ神と呼ばれる爬虫類ハンターの生物の先生は今年50歳前に教員を辞めて、途絶えてしまう畳職人のあとを継ぎながら、ココロギを飼って、コーヒー園を営むそうだ。

自分を生きながら人生を楽しむ人の数だけ本は産まれる。

で、読んだの？

△フカミ ヒロミ

（フライング・ブックマン）

読んでいない本について如何に学生（や聴衆）に語るか（飛んできた質問を如何にかわすか、を含む）、の技法を種々紹介している。恐らく必要に迫られていることであろうが、こういうことを真面目に書く人がいるというのも当世風であろうか。まさか、この本が教員のハウツー本になつてはおるまいな。

で、表題である。

ピンとくる人には、ピンとくると思うのだが、かつて、筑摩書房が新書に投げ込みの葉で遊んでいたことがある。二十年前くらい前になるだろうか。

同社が、新書を創刊したタイミングだったと思うのだが、葉にマックス・エルンストのカラー・ジュ風に、十九世紀の雑誌から切り抜いたような貴婦人の版面を配し、台詞を一言添えたのだった。

その台詞のセレクトが秀逸だった。

いくつかのヴァージョンがあったが、今でも覚えている、一番インパクトがあったのが、表題の一句である。ツンと澄ました風情の貴婦人が、その台詞を吐いているという趣向であった。

自虐ギャグというのか、自爆ギャグというのか、兎に角、笑いませたね。寅さんじゃあないけれど「それを言っちゃあ、お終いよ」の世界ではないか。流石、「蔵前どすこい通信」の筑

一昨年のこと、『バーナード嬢曰く』という妙なタイトルのコミックが話題になったことがあった。本屋で三冊が平積みで並んでいるのを見つけて、余程売れているのであるうかと気になり、ハズしたら嫌だなと思いつつも、誘惑に抗えず、まとめて買って帰った。（今夏、約二年ぶりに第四巻が出た）

意外に、といつては作者に失礼だが、拾い物だった。超おすすめ、するほどではないが、「知ったかぶり」というスタンスが新鮮だった。読んでいない作品を、如何に読んだふりをして、相手を煙に巻くかに腐心する女子高校生のお話である。如何せん、後の巻になるほど、ビブリオバトル化して、「語る」方に熱が入ってしまい、所期の目的が忘れられているようではあるが。

この種のものでは、パイヤールの『読んでいない本について堂々と語る方法』という名著がある。著者は大学教授で、

摩だけあつて、体当たりというか、捨て身というか…。

で、読まれざる名作というのを考えてみた。

この種の話題で、必ず出てくるのはプルーストの『失われた時を求めて』であろう。全七篇。翻訳すると、少ないもので五巻(その代わり、版組が凄いいことに！筑摩くん、あんたのことだよ、あんたんとこの「世界文学大系」)、多いものだと十三巻に及ぶ。誰だったか、これを読了した人は、名刺にそのことを刷り込んでもいい、と言っていた(笑)が、まあ、それくらいステータスが低い作品ということだ。

一卷目の半分くらいまでは、何とか我慢して読むが、その後の根気が続かず、挫折…というパターンが多いのではないか。何せ、退屈ですからね、この小説。

あちらが極北なら、極南(こんな言葉があるのか)はムージルの『特性のない男』あたりだろうか。全九巻の著作集の内の六巻を同作品が占める。プルースト全集も、全十九巻の内十巻が『失われた』だから、いい勝負だろう。

文学ではないが、長さでは負けないサミエル・ピープスの『日記』がある。十七世紀のイギリス官僚の日記で、十巻の翻訳が出ている。他人様の十年分の日記を読む、というのも苦行ですなあ。上流階級の裏面や、色恋が赤裸々に記録さ

れているとはいえ。

『千夜一夜物語』もなまじ子供の頃から知っているだけに、改めて完訳で全部読もうという気にはならない本だろう。アラビア語原典版が東洋文庫で十九巻。バートン版(英訳)はちくま文庫で十一巻。マルドリヌ版(仏訳)は岩波文庫で十三巻。どこで中断しても差し支えないから、途切れ途切れでも気長にやれば読めそうな気もする…のだが。朝読に如何だろう。

一体に、古典と言うのは退屈な物で、それというのも小説作法が現代と著しく異なるからである。物語の沿革から、枢要でない人物の描写から、脇のエピソードが本編を乗っ取りそうなほど長かったり、と退屈の材料には事欠かない。

ボツカチオの『デカメロン』にしても、世界史や文学史で必ず教わるから、高校生でも知っているが、翻訳を読んだ人間を聞いたことがない。実際、完訳本に手を出すと、いつお話が始まるんだ…と途方に暮れる。もう、パズリーニの映画で十分、という気になつてしまう。(そういえば「アラビアンナイト」も「カンタベリー物語」も映画化しておりますな。彼は偉大だ)

6月の日記

坪井日記 ⑨

齊藤仁昭

(長崎書店)

8月某日

毎年夏の恒例、岡山神戸ツアー。どの会場でも男性客の割合が多い訳だが岡山と神戸はその男性客の怒号が素晴らしく、曲の終わりに「オラあ、もつとやらんかい！」などと野次が飛んでくると大変身の引き締まる思いで演奏に集中力が増す。今年もありがたいに野次をいただき楽しく演奏することができた。岡山では握った缶ビールを前にいるお客さんの頭にぶつけて乾杯する新しいスタイルも目撃され、そこに始めて居合わせた広島からの来客はおびえていたようだが当人たちは至って楽しそうであった。

地方に行くと、東京のライブハウスのお客さんとは楽しみ方が違うことに気付く。地方はお客さんも参加者かつ当事者であるという意識が強く、パーティーを全力で楽しみに来ているようだ。一緒に遊ぶ仲間っぽさがある。東京はどうしても傍観者っぽい。なんでだろう。東京で

よく演奏していた頃はどのライブハウスにもホーム感がなかったが、岡山と神戸には一年に一度しか行かないのにホーム感がある。ホームだから良いって訳でもないのだけれど。代わりに、楽しんでもらえなくなったら終わり、というシビアさもあるかも知れない。

岡山のライブ前に「スロウな本屋」という本屋さんに立ち寄った。木造の長屋を改装した建物で、靴を脱いで上がると、畳の部屋に本が置いてある。たいへん居心地のいいお店だった。

9月某日

『本の雑誌』10月号に「スリッパを救え！」と題する特集が掲載されていた。版元は経費削減のためにスリッパを廃止していきたい方向のようで、既にKADOKAWAの文庫にはスリッパが入っていないし、いくつかの版元からは順次スリッパを廃止しますという内容のファックスが書店に届き始めている。

ある版元の方に聞いた話だとスリッパを作って本に差し込むまでの経費で年間数千円だとのことで、確かに出版産業の現状を考えると経費削減は必須なのだけれど、私の勤めている書店ではスリッパをメインに商品管理をしているので、性急な廃止は勘弁してくださいという思いがある。

その日に売り上げた本のスリップを捲りながら1日を振り返り、まとめ買いされた商品から客層を想像し、題名や著者名からキーワードを抽出し新たなテーマを見つけ出して本を注文するというアナログな作業がやはり小規模な本屋の仕事の醍醐味なんじゃないだろうか。POSデータでのチェックもできるのだから、画面はスリップに比べると平坦過ぎて何かを見落とす可能性が高い。スリップは版元ごとに色や大きさ、フォントなどが違っており、感覚的にどのスリップがどの版元のものかわかるようになってくる。今この版元の本が売れているのだなという感触が手と目でわかる。だから体に染みて経験や技術となる。まだ書店で2年しか働いていないのにこの偉そうな物言いはどうかと思いますが、スリップはとにかく使いやすい。でもやっぱり徐々になくなっていくのだろうかと思う。

9月某日

勤める書店で、あからさまに差別を煽っている雑誌や書籍を売ることが耐え難い。自分の担当ジャンルではないとは言え、会社がこれ以上その手の本を扱い続けるのであれば次の仕事を考えざるをえないんじゃないだろうか。今のままでは暴力に加担しているのと変わらない。考え過ぎかな。いやそんなことない。

9月某日

神戸の界限で自分のあだ名が「おクズさん」らしいと又聞きし、思い当たる節を思い出そうとしたが、飲み過ぎて毎年記憶がないので何も思い出せない。来年は信頼を挽回せねばならない。

*

見ないで僕の顔

こわばったこの筋肉

この前の集団の

ダサ涙めちやわらえた

もうやめてよ やめてよ やめてよ やめてよ

今日の朝、朝食に

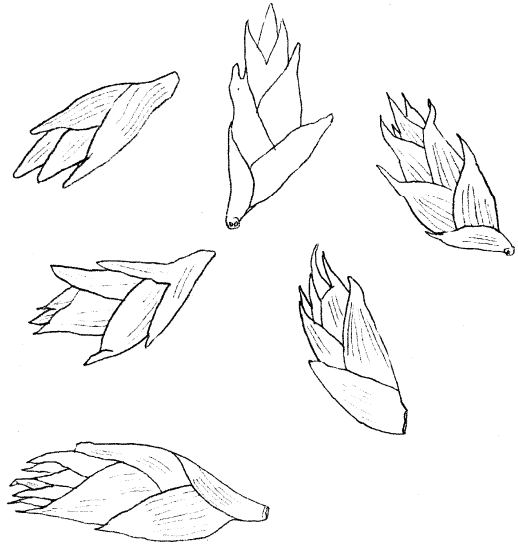
ダンゴムシが入っていた

トイレに居座っていた

ゴキブリはゴム製だった

もうやめてよ やめてよ やめてよ やめてよ

(ケバブジョンソン「やめてよ」、作詞：橋本悠)

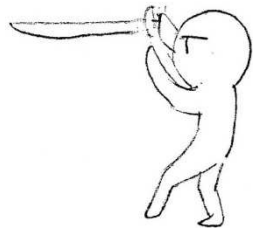


Miyouga



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階



良夜



五百川 知子

アシル

くるぶしに朝の風や涼新た

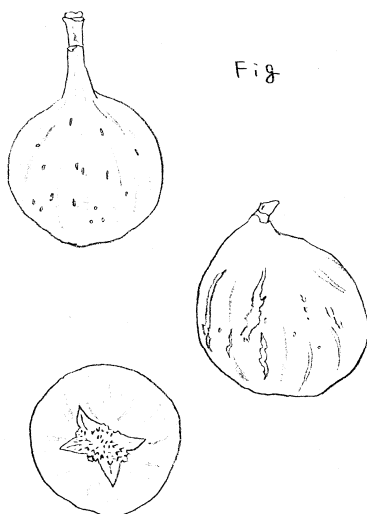
星月夜シテのいよいよ能舞台

庭下駄を履きて良夜をほしますま

町の中無月に余白多かりき

秋の海9号線の寄り添へり

Fig



もったいない

うしきのどこか

(鳥取環境大学・環境学部)

最初に自分の意識が、周りとそこまで違うのかと思っただけ。出来事は、普通二輪いわゆるオートバイクの免許を取りにいった時に、周りに物珍しいものを見たような反応をされたことだ。親も反対しなかったし、自分としては、時間に余裕があるうちに取れる資格は取っておきたかった。危険性や定期的に乗らないと意味がないことは知っている。しかしそれを踏まえても持っていて損はない資格のはずだ。バイクに乗れたらカッコいいし、移動手段や仕事や趣味などの可能性も広がる。それに支払う金額も時間も、もったいないとは思わない。

けれどそんな私の考えはどうやら少数派らしい。大学や自動車学校の指導員の反応を見ると、同年代の多くの人たちは滅多に使わないバイクの免許をわざわざ取ることは割に合わないと考えているようだ。なんだかその姿勢はとても省エネで暮らしているように思える。自分に興味ない関係ないことは綺麗に排除するような省エネモードだ。

そう私を思わせたのは、免許だけでない。私の所属する学部では教員過程が選択できる。そのガイダンスに生徒の1/5ほどしか来ていなかった。話すら聞かないのか！と私は驚いた。夏休みの最後のほうの1日だけがガイダンスの日だった。確かに丸一日がかりなので、疲れたり、めんどくさいのはわかる。ほとんどの生徒は足早に帰っていった。私にはその行為のほうがお金を無駄にしているとしか思えない。

教職課程に時間を割く暇がないほど何かに夢中になっていた。将来がはっきりしている人なら、余計なお世話だと思おう。けれど私を知るかぎりそんな人ほんの僅かだ。私を含めた多くの人は将来を決めかねている。将来の決定を引き延ばしにするために、大学に来たという意味も大きいのではないか。なら、なぜ将来の可能性を切

り捨てるのだろうか。同じ学費で教育という分野も学べる。誰だって食べ放題に行けば、質の高いものをたくさん食べようとする。けれど、学校の勉強に変わるとそうはならないようだ。自分が言うのもなんだが、お金で買えるような遊びしかしないのより、若いのだから今しかできないもつと面白いアソビをしたくないのだろうか。

そこには「リスクを取りたくない。責任を取りたくない」という意識が強く強く働いているように見える。「リスクなく手軽に楽しめる分でもいいや」という風潮はとても強い。手軽に満足感を得られる世界になったからか。先が見えず不安定な未来のために安定を求めているからか。どちらにせよ、あまり良くないことが原因のように考えられる。でもそれが行き過ぎれば、逆に満足感も安定も得られていないのではないだろうか。



siso

九月といえは



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

九月の鳥取は何といっても梨の季節、八月から始まって微妙に収穫の時期を変えながら多品種が並ぶ。鳥取大生生まれのブランド秋栄など、私の知らない品種名もあるが、ネーミングで気に入っているのは新甘泉、いつの間にか秋甘泉、優秋、秋麗、王秋、季節感たっぷり、甘さもたっぷり。梨ばかりではない。九月は鹿野で開かれる「鳥の演劇祭」が、私にとっては一年で一番の楽しみだ。毎年新たな試みがなされていて、すべてを体験することは無理だが、鹿野の町を歩き、ここでしか味わえない食や数々の手作りの品に出会い、そして観劇。

今年はず駐車場になっているグラウンドに着くと、木で作られた大きな鳥が迎えてくれて、期待感が一層高まった。わくわくしながらオープニングパーティーに参加した。この演劇祭のために来られた国内外からの出演者の皆さんの歓迎の意味も込めた、関係者、地元の方々のみならず、私たち観客も参加できるウェルカムパーティーだ。俳優さん、パフォーマーの方々が、舞台とは違った顔で私たちの前に現れて、笑いをも誘う楽しい出し物が次々と披露される。アットホームな雰囲気の中、一緒に盛り上がっていく。

地元の方との会話から。自分の卒業した小学校が廃校になってさびしい思いをしていたら、劇場としてよみがえって、演劇を楽しめるようになったので嬉しい、と。今年の作品『剣を鍛える話』もここで初演から見えてくれたそうで、今回初めて見た私にとっては、これまでの上演と比較しての感想に大変興味を持って話を聞いた。ちよつと間があつて、「でも、鳥の劇場の公演しか見たことがないので……」

いや、むしろそれでいいのではないのでしょうか。いろいろな劇団のお芝居をたくさん見た方がいいよ、と言われる人もいるかもしれないが、時間的、金銭的な制約が

あるというよりも「そこにすべてのものがある」そういう劇団に出会えたのであれば、その一つを大切にすることで充分だと思う。ここに来た一人一人がそれぞれに何かを思ったり、何かを、時には一体感をも、感じたりできる場。そして「鳥の劇場」の作品を通して演劇の世界にある様々な表現方法を知ることまでできる。その上、演劇祭では海外からの舞台も楽しめる。自宅から歩いて行けるところに「鳥の劇場」があるなんて、うらやましい限りだ。

パーティー会場で若い人たちが目立つと思っていたら、高校生だった。そうそう、小・中学生対象の「小鳥の学校」だけでなく、高校生の演劇プログラムもあったのだ。高校の演劇部の人たちが参加しているのだとばかり思っていたが、その男の子は、全く初めて演劇に挑戦してとても面白かった、と感想を言ってくれた。勇気あるなー、でも輝いている彼の眼は最初からそうだったのか、それともこの演劇プログラムに参加してからののか。すでにチケットを予約しておいて正解だった。一週間後の『極東ラブストーリー』が楽しみだ。

パーティー半ばで「お年寄りのダンス」が披露された。いかに明るく楽しく踊るかで年齢なんて飛び超えていた。

『お年寄りのお年寄りによるみんなのための演劇』という舞台もあるそうで、高齢者による演劇があることを初めて知った。ということは、鳥取在住で定年退職後に何をしようかと考えている人は、迷わずお芝居をやってみることができるのだ。全国から「鳥の演劇祭」を見に来ている人たちも、定年後に移住して今度は自分たちが舞台に立ってみる、というのでもいいのでは？ 各地の方言が飛び交って面白そう。鳥の劇場には字幕設備も完備しているし。ちよつとずつ体の自由が利かなくなってきた、ここなら「じゆう劇場」の先輩たちから指導が受けられる。セリフを覚えることは認知症予防になりそうだし。うくん、想像力が広がる、広がる、夢と一緒に。

さあ、またこの一年、頑張ろう。そして、来年はボランティアに参加してみようとか、ナイトイベントにも参加してみようとか、星空を見ながらテントで泊まるのもロマンチックだなーとか、今年は見逃がしたけれど来年もありそうな『お年寄りのお年寄りによるみんなのための演劇』、昨年に引き続き今年も来年も見たい『ロミオとジュリエットから生まれたもの』、どんな新しいロミオやジュリエットが登場するのか……

鳥取あれこれ

その二十六

内田克彦

(地域研究家)

戦後直後における廉三の動きについて、『側近日誌 侍従次長が見た終戦直後の天皇』に記載があった。昭和二十一年五月二日(木)の項に、次のように書かれている。

午前中沢田廉三氏来室。陛下に拝謁。沢田君が天長節賜茶の際、陛下に申し上げたる戦犯弁護方法につき、陛下には一寸御気懸りの点ありたるにより、改めて申し上げたるなり。所謂印度流にては、日本にては成功し難かるべしとの御心配ありたる為なり。

澤田廉三は一九四五年五月に外務次官を退いた後、どう過ごしていたのか。『澤田廉三と美喜の時代』の「第八章 昭和二十年」には、「鳥取県浦富町小磯鷗鳴荘」に疎開していた美喜に宛て、東京の空襲の状況を報告したり、「たつた一軒残つた事はなんと言つても奇蹟」であった麴町の家を外務大臣官邸に借り上げたいとの申出を受け相談したいとして上京を促したりする、五月二四日から書簡が多数収録されている中で、七月廿二日付けの書簡に「小生もふ相変外務省関係の会合などに顔を出し重光君依頼人を訪問したりして暮し居申候」とあるように、何やら情報収集に動いていたことが読み取れる。

さて、八月十五日を迎えた。『沙鷗吟草』に、「玉音を押し相哭く民の秋」と詠んだ句が収められている。

廉三は、一九四五年一〇月、インド・デリー市の英国軍司令部で行われた、チャンドラ・ボース麾下の將校三名の軍事裁判に赴いている。外務省からは、前外務次官の松本俊一と廉三、事務処理担当の太田三郎参事官が、陸軍側からは、片倉衷元少将と藤原岩市元中佐が、証人として出かけたが、『B29クラス、四發四十人乗りの飛行機を専用として、印度まで往復空の豪華な旅』であったと、『凱旋門廣場』に記述している。

しかしながら、『凱旋門廣場』には証言内容の記述はなく、探してみたところ、岩井忠熊著『陸軍・秘密情報機関の男』の中に書かれていた。出典は著者の義兄の香

川義雄の手記である。「はじめ日本側証人たちは、インド仮政府やインド国民軍が、日本政府の強要でできた傀儡政権と傀儡軍で、被告たちに責任はないと弁明するつもりでいた」が、面会したところ、そうではなかった。

被告たちの求める証言は、日本はチャンドラ・ボースに独立的な性格を認め、被告たちは独立の軍として行動したもので、日本軍とは協働の関係にあつても、隷属の関係はまったくなく、独自の考えで動いたことを明らかにしてほしいというものだった。(略)

沢田は、インド仮政府は日本政府が正式の手続きで承認した、国際法上の完全な人格者として成立したものであることを主張し、日本からは公使も派遣されていたことは、独立の政府として国交が開始されたものであると証言した。

実は『凱旋門廣場』には、「デオリイ異変」と題して、インド・デオリイの日本人収容所での出来事を主に書いていたのである。英軍司令部から「この日本人たちはいづれも日本の敗戦を肯定せず、話してやつても新聞を讀ませても、それは宣傳に過ぎないと言つて全然信じない」、「日本の近状を話して彼等を納得させてもらいたい」と頼まれたため、一二月朔日夜汽車で出かけることにした。

私は持ち合せてゐた雑誌に、八月十五日の終戦の御詔勅が掲載されてゐたので、先づこれを朗讀し、その御趣旨を敷衍説明して、降伏の悲壯なる實相と、これを甘受しつつ平和と文化の新たなる國家を打ち建てん

と陳べて帰つたのだつたが、事件は翌年二月二六日に起きた。「澤田といふのは眞個の日本人だらうか」、「英國側が日本語の達者な外國人を備つて来て、自分たちに日本敗戦を誤信せしめようとの、芝居を演らせたものに違ひない」と主張する者とそうではないとする者との対立感情がもつれ合い、遂に「非澤田派は男女共に手を棍棒、竹槍の類を携へて澤田派を襲つて亂闘を始め」ることになつてしまつたのである。

「私が外國人に間違へられたため」「誠相濟まぬことと思ふ」としながらも、「それに原因して、多數同胞が早く日本に歸還出来るやうになつたことを思へば、功罪相償ふものがある」として、「私は誰に、どう言つて釋明したらいいのかしら？」と書く廉三に、どう応えればよいのだろうか。

(以下、続く)

天平の詩魂 (上)

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

0

明治の世、漱石が伊豫に赴き『坊ちゃん』を書いたやうに、因幡にはかつて稀代の大歌人大伴家持が来鳥、在任中詠んだ歌こそ少ないものゝ畢生の大事業を成した、萬葉集の編纂である！…都の政争から遙かに遠ざかり、左遷された牧歌的田園風景広がる風光明媚な地、長閑な悠久の時を得てゝ未だ學術的に確認されぬ事ではあるが、東洋の歴史的なアンソロジーがおそらく此の地に於ひて上梓され、古典中の古典と成つて傳へられ千三百年を経た現在も遺つてゐる、何といふ壮大な物語！

I

……僕はかつて、家持の叔母であり、歌の師。後には姑

ともなつた閨秀歌人大伴坂上郎女の歌に心打たれ幾度となく附曲し作品と共に海も越へ公演を重ねた。

其れは情感に満ち詩魂に溢れ艶やかで麗しひテクスト乍ら素朴で奇を銜ふ事の無い凜とした香気を放つ逸品で僕には、邦語に抛る初の戀歌と成つた。詞(ことば)が書にそして活字と成つて傳へられ今僕らが口にする事で古の思想が甦り、人の想ひや愛情の傳へられる不可思議。

II

……其の愛弟子であり一族の未來を託された甥家持の生涯を扱ふ、傳記を上梓された中山和之氏は、因幡に生まれ奈良に學ばれ家持に拘りを持たれる土地の學者であり此の事業を通し、一般的に中央(都)或いは越後の家持ばかり知られるけれど「因幡時代の家持」にこそ深い眼差しを向けて居られる。

III

……家持生誕千三百年を数へる今年幾多の事業が運ばるゝ中、氏の間家持の生涯を描いた小説を戯曲化しリーディングの形で上演される催し※に鳥劇は演出協力する形で補佐させて頂いて居り中島の許、僕も当初演助とし

て台本に携はり、後作曲家として新井満氏の付曲された「祝い歌」の編曲及び新作の作曲を担当し合唱の歌声に載せ舞台に運ぶ事に成った。三つの合唱曲は何れも家持の作歌に拠るもの。眩暈するやうな、次元を遙かに超へ遺された詩に現代の市民の歌声が重なり劇中謳はれる。此の芝居一見かなり地味で数々の記念事業の中に埋没しがちではあるが「因幡の家持」を世に問ふ初穂として其の意味は決して軽く無い。亦、今後も中山氏を中心に為されるであらう「因幡の家持」研究ムーヴメントに在って何らかの起爆剤として、ギャラリー、リスナーのお心に届き志を未来に繋ぐものになれば！と：かなり私事に成ってうたったけれども乞い願ふ次第。

以下次号。

2018 (平成30) 08.31

※「大伴家持く祝い歌誕生」10月20日13時50分

鳥取市国府町コミュニティセンター

(問) 0857・26・1780 因幡万葉歴史館内

【今回の3枚】①J.シベリウス「祝祭アンダンテ」J.

シベリウス指揮フィンランド放送管弦楽団 (1939.1.1
実況放送録音)

②R.ヴォーンウィリアムズ「揚げ雲雀」A.ボールト
指揮ニュー・フィルハーモニア管弦楽団H.ビーン
③I.ストラヴィンスキー「夜啼き鶯の詩」(HCh.アン
デルセン原作)P.サバタ指揮ストックホルムフィルハー
モニー (Rec. 1947)

【今回の一冊】「萬葉集」

画. A. T



大伴家持
716~785

そばのみそ煮

あきの素生

(くうねるめがね)



学生時代、ひとり暮らしを始めたばかりの頃、自分の好きなものだけ食べられる自由に戸惑った。が、戸惑いはわりあいすぐに消えて、自由だけが残り、それに慣れた。食べない自由も同時にあって、面倒くさいときは、

その自由も思いっきり行使した。グレープフルーツだけしか食べなくてもいいなんて、さしみこんにやくだけしか食べなくてもいいなんて、ああ、ひとり暮らしっていいなあと思ったものだ。

お昼ごはんも惨憺たるものだった。一番思い出に残っている(ひどい)お弁当は、2段重ねのお弁当箱の1段目にお茶漬けの素、2段目に白ごはん、ポットにお湯を入れて持って行ったお茶漬け弁当。食べることに執着しがちな現在の自分からは考えられないくらいの頓着のなさだが、食欲よりも、生来のものぐさが勝っていた。ものぐさの割には、お弁当を作ったり(あれを「お弁当を作った」と言えるのであれば)して頑張っていたなあと思つてやるべきか。新生活への期待とおぼつかなさ、突

きつけられる自分の性分、理想とのギャップ、押し寄せてくるいろいろなことに、頑張っている自覚もないまま、頑張つて対峙していた時期だったのだろうな、と今は思う。

とはいえ、そんな有様だったので、みるみる体重が落ち、かつてないほど肌が荒れた。かつてなかったので、再び戸惑った。こちらの戸惑いは、なかなか消えてくれなかった。ただ無邪気に自由を謳歌していただけだったので、食生活が原因だと骨身に沁みるまで、少し時間がかかった。

これではいけないなあ、と少しずつわかり始めてから、学食で選ぶメニューが変わった。そう、学食。最初から、あんなお弁当なぞ作らず、学食で食べていけばいいようなものだが、学食を使いこなすのにも経験値が必要だった。そして、たまに利用するときには、ラーメンや丼ものを選びがちだった。食べるのが楽だからだ。おいしいし。

先輩たちに交じつて学食を利用するのにも慣れ、栄養バランスを多少なりとも考えるようになった頃、学食の「そばのみそ煮」にはまった。何というか、絶妙だった。ほどよい甘さ、身の柔らかさ、脂の乗った端っこの部分は口の中で溶けた。こっくりとしたみそがかかっている、

身によく絡んだ。このみそ煮に出会って、野菜料理の小鉢、白ごはん、メインというお昼ごはんが俄然楽しみになった。

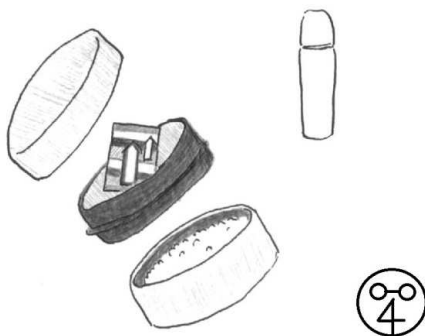
しかし、みそ煮は、いつもあるわけではなかった。煮たさば粹というのがあったのかどうか、「さばの生姜煮」かみそ煮のどちらかが並ぶことになっていたようで、しかも交互に出るとか、曜日が決まっているという風でもなかった。空振りに終わることもままあった。みそ煮に出会えなかった日は落胆した。

生姜煮に当たる日が続き、とうとう自分で作ろうと思いついた。当時は、みんなが自分のレシピを紹介し合うようなWebサイトはなかった(そもそも下宿にインターネット環境どころか自分のパソコンもなかった)ので、本で調べて、レシピをメモ帳に書きつけた。ものぐさではあったが、みそ煮のために、書いてあるとおり、まじめに作った。

しかし、出来上がったみそ煮は不味かった。お世辞にもおいしいとは言えない、とかではなく、はっきり不味かった。学食のみそ煮ほどまでは期待していなかったが、自分で作るとこんなに不味いのか、とひどく落胆し、学食にみそ煮が並ぶのをおとなしく待つ日々に戻った。

数年後、唐突に気付いた。みそ煮を作るのに、塩さばを使っていたことに。スーパーに並んでいるさばに、塩さばと、味のついていないさばがあるなんてことも知らなかったのだなあと、ひとり苦笑した。みそ煮を巡るあれやこれやは、文字通りしょっぱい思い出となった。

あのときのレシピのメモ帳は、今でも手元にある。先日、メモ帳を見ながら、みそ煮にリベンジした。記憶の中の学食の味には及ばないけれど、悪くなかった。メモ帳の文字は、今よりずいぶん几帳面だった。





・編集後記:

九月末から十月上旬にかけて、長期の東京研修です。
： ルスしてしますので、ズルして連載もお休みです。

ドラマメリア (編集長)

定有堂のホームページは二〇〇〇年につくりはじめ、最初はとても熱心に更新していたのですが、そんなに広範囲に知られることもないのでは? という気分について、の間に陥ってしまい、ながく消極的でした。ニフティのサイトだったのですが、ニフティの都合で二年前にアドレス変更があり、以来、検索エンジンに無視されました。…ふと思いつくところあり、ここ十日ほど熱心に更新しています。昨日、麻野嘉史さんが、検索でヒットするように、ウェブページ記述のためのマークアップ言語をいじってくれました。…結果がたのしみです。

<http://teiyu.na.coccan.jp/>

右がアドレスです。「音信不通」のバックナンバーも掲載してあります。

奈良敏行 (発行人)